市公式 LINE
LINE ID @975lauty
WEBやSNSで情報発信中です！
市公式フェイスブック
https://m.facebook.com/fukutsu.city
市公式インスタグラム
https://www.instagram.com/fukutsucity/

平和だからこそ感じられる瞬間を大切に

津屋崎と戦地で交わされた手紙　朗読で平和学習

津屋崎小学校の体育館で9月12日、6年生を対象に平和学習が行われました。講師として招かれたのは、津屋崎を拠点に、戦争に関する展示や、朗読講演を行う「つばめの記」の皆さん。平和学習では、戦時中に交わされた故郷（津屋崎）の父と戦地の息子の手紙のやり取りを朗読で紹介するというものでした。ギターが奏でられる中での朗読で、手紙に同封されていた写真などがスライドショーで上映されていました。

つばめの記の深田麻紀さんは、この登場人物である父と息子の親族です。自宅に残されていた戦争に関する資料や関連品を、遺族という立場で紹介する活動を数年前から行っています。

深田さんは「親子で交わす言葉や一緒にご飯を食べる時間、平和だからこそ感じられる瞬間を大切にしてほしい」と話し、児童たちが戦争についてより自分ごととしてとらえるきっかけとなっていました。

▲児童たちの前で朗読する深田さん

多様な体験を成長の機会に

Survival Academy2025

9月から営業を再開した大峰山キャンプ場を舞台に、宗像青年会議所が主催する「Survival Academy（サバイバルアカデミー） 2025」が9月13日と9月14日に開催されました。

自然の中での体験を通じた成長や、リーダーシップ、団結力を養う場として市内外から30人の小学5・6年生が参加し、塩づくりや火起こし、テント張りなどを行いました。

グループでの共同作業だけでなく、イノシシの解体見学など、普段体験できないことを見て・聞いて・感じる2日間となっていました。

▲火おこしに悪戦苦闘する子どもたち

磯焼けを防止するために

海の環境を守るウニ駆除作業

津屋崎の海岸で磯焼けの原因となるウニの過剰繁殖を防ぎ、海の環境を守ることを目的に、9月22日、ウニ駆除作業が行われました。

宗像漁業協同組合津屋崎支所の漁師が陸側からの駆除と素潜りによる海中での駆除に分かれ、また、県立水産高校の生徒や市職員も浅瀬に入り、陸側からの駆除を行いました。

地域の海を守るこの活動は、今後も継続して行われる予定です。関係者の連携と実践が、豊かな海の未来につながっています。

▲福井市長もウニ駆除作業を体験しました

十二単（じゅうにひとえ）をまとった祭王に歓声

宮地嶽神社秋季大祭

宮地嶽神社秋季大祭が9月21日から9月23日にかけて行われました。宮地嶽神社参道を練り歩く御神幸行列の今年の祭王には福岡を拠点に活動するアイドルグループ「LinQ（リンク）」の元メンバー、髙木悠未さんが務め、沿道の観客からは大きな歓声が送られていました。

▲沿道の観客に手を振る髙木さん

楽しみながらSDGsを学ぶ

サステナフェス2025

持続可能な社会づくりをテーマにした「サステナフェス2025」が、9月19日から9月28日までイオンモール福津で開催されました。

小学生によるSDGsの取り組みを紹介する展示や環境フォーラムなどが行われ、多くの来場者でにぎわいました。

▲プラバンキーホルダー作りをする小学生

日頃の活動を振り返る時間に

子育てサロン交流会

市内各地域の子育てサロンのスタッフ向け交流会が、9月25日に開催されました。

九州大学の平井教授がファシリテーターを務め、参加者からは「子どものおもちゃをどう選ぶか」など、さまざまな質問や意見が交わされ、学びの機会となりました。

▲各サロンから意見を引き出す平井教授

津屋崎でたのしむ秋のひととき

音楽散歩2025

津屋崎千軒一帯で「音楽散歩2025」が10月13日に開催され、ギターや三味線、昭和歌謡やゴスペルなど、楽器もジャンルも多彩な音楽が歴史あるまち並みに溶け込んでいました。

来場者は町を散策しながら、各所で繰り広げられる音楽に耳を傾けていました。

▲豊村酒造ステージではジャズの演奏も

街角カメラリポート

～読者の皆さんから寄せられた市内の出来事や旬の話題をお届け～

津屋崎活州会社

今回はU・Tさんからの投稿です

以前「昔、大峰山の麓に大きな活州場があった」と聞いたことがあった。そのときは疑っていたが、その疑問が去年の12月21日の「小さな灯り展」で解けたような気がした。

それは店の中にあった1枚のパネルからだった。説明によると、明治40年「津屋崎活州会社」が、渡半島の南端、今の津屋崎中央病院側の奥の方に創設されたという。

約240mの堤防が築かれ、中でタイやヒラメなど約50種類の魚を養殖して、近くには魚料理を提供する料亭もあったといわれている。活州場は評判になり、連日大勢の人々でにぎわったらしい。しかし、明治43年になり伝染病が大流行し、さらに度重なる自然災害などによってわずか3年で会社は幕を閉じることとなった。

遠くからその堤防跡を臨むと、酌み交わしながら刺身を口に運ぶ。そんな活州場での楽しそうな人々の笑顔が目に浮かぶようだ。

▶防波堤跡